

## 人権の世界の輪

大谷 藤郎

国際医療福祉大学学長, (財) 藤楓協会理事長

1998年6月20日、東京のシェーンバッハ・サボーで“人間の尊厳回復と共生をめざして”をテーマに、「ハンセン病回復者の国際交流会議」が開催された。日本の全国ハンセン病療養所入所者協議会、ニューヨークに本部を置くアイデア(共生、尊厳、経済向上のための国際ネットワーク)とハンセン病支援団体である藤楓協会三者の共催。会議には日本全国からのハンセン病療養者、支援者、専門家、学生、一般市民など600名以上と、それに加えてアイデアのメンバーであるインド、エチオピア、中国、韓国、フィリピン、アメリカ、ブラジルから13人が参加された。

アイデア(IDEA)とは共生(Integration)、尊厳(Dignity)、経済向上(Economic Advancement)の3つの目標を掲げて、ハンセン病患者

者・回復者自身が「社会の偏見差別を打破するとともに尊厳をもって自立していけるようにしよう」とする世界的な運動体である。

アイデアの方々を日本に招き、アイデアの精神を知ってもらいたいというのは、1996年「らい予防法廃止」のとき以来、笹川保健協力財団の山口和子女史とともにかねがね私が抱いてきた夢である。山口女史の努力によって、これまですでにアイデアのメンバーの3度の来日が実現しているが、いずれもオーソドックスな国際会議というものではなかった。それがようやく実現したのが今度の会議だ。

この会議に私が期待したのは、次のようなことであつた。

- 1) アイデアの活動を日本国内に知ってもらう。
- 2) 日本のハンセン病事情をアイデアを通じて世界に知ってもらう。
- 3) 世界との討議を通じて「らい予防法廃止」の本当の意味を問い直す。

この会議のメインは、日本代表曾我野一美氏も含めた各国代表によるテーブル討論(座長高瀬重二郎全療協会長と私)で、その後東京宣言が採択された。



東京宣言は、ハンセン病患者・回復者が自ら、一般市民としての権利および責任を自覚し、積極的に社会と関わっていくと同時に、地域社会もそのような努力を積極的に受け入れることを強く要請するものだ。

私はハンセン病問題に長年かかわってきて、「らい予防法廃止」にも

直接かかわったが、その際「らい予防法見直し検討会」座長として政府に要望した4本の柱の1つに「らい予防法廃止を記念する何かを政府として考えられたい」というのがある。それは、一つは国内のハンセン病患者・回復者に対する償いのものとか、また海外のおとしめられ苦闘している同病者の方々に対して連帯・支援の手を差しのべるといったことなどだ。

その意味で今回の国際交流会議に政府が全面的に支援をされ、海外からアイデアのメンバーを招くことが可能になったのは、「見直し検討会」の趣旨にかなう、日本政府にとっても意義あることであつたと私は考えている。